

2026.02.08.

「神様に召された者」

旧約 出エジプト記19章20～25節

新約 ヨハネによる福音書6章60～71節

1. はじめに

ヨハネによる福音書を共に読み進めております。ヨハネによる福音書の6章は「5千人の給食」の出来事から始まって、22節以降イエス様は「永遠の命に至る食べ物のために働きなさい」(27節)、「神のパンは、天から降ってきて、世に命を与えるものである」(33節)と告げ、そして「私が命のパンである」(35節)、「わたしは、天から降ってきた生きたパンである。このパンを食べるならば、その人は永遠に生きる」(51節)更に「私の肉を食べ、私の血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる」(54節)と告げられてきました。これらのイエス様の言葉は、肉の命と霊の命、限りある命と永遠の命があり、霊の命・永遠の命を与えるためにイエス様が来られたことを告げています。それは、救われるとはイエス様を信じてイエス様の体と血とに与ることであり、イエス様と一つとされ、イエス様の命に生きる者とされることであることを示しています。しかし、これを聞いた人々は、パンといえば普通に食べているパン、命と言えども目に見える肉体の命しか知らず、永遠の命とか命のパンとか更に「イエス様の肉を食べ、血を飲む」という言葉は、何を言っているのかさっぱり分かりませんでした。さっぱり分からないどころか、気味の悪い、とても聞くに堪えられない言葉としか受け取ることが出来ませんでした。確かに、イエス様がお語りになった言葉は、一度聞いて「はい、分かりました」と言えるような言葉ではありません。それはいつの時代でも、どの国の人にとっても同じです。

しかし、イエス様の言葉は二千年後の現在に至るまで、全世界で語られ続け、困窮の中にある人々に生きる希望を与え、力と勇気とを与え続けています。それは、イエス様の言葉が真実だからです。しかし、それだけではありません。イエス様の言葉を真実な言葉として受け取ることが出来るようにと、聖霊なる神様が働は続けてくださったからです。聖霊によらなければ、イエス様の言葉、聖書の言葉、神の言葉が真実であることは分かりません。私共は毎週ここで祈りを捧げ、聖書の説き証しを聞き、御名を誉め讃えて、主の日の礼拝を捧げています。この礼拝において、私共は必ず「聖霊なる神様がここに臨み、全てを御支配してくださるように」と祈ります。必ずです。聖霊なる神様によらなければ、私共は聖書の言葉を、自分に告げられた神様の言葉として聴くことはできないからです。私共は聖霊なる神様を見ることは出来ません。にもかかわらず、聖書の言葉が私に向けられた言葉であると受け止めることが出来たとすれば、そしてこの言葉に従って歩んでいこう

という思い、信仰の志が生まれたとしたら、聖霊なる神様はここにおられ、確かに働きくださっている証拠です。聖霊なる神様は、そのような出来事をもって、私共に自らをお示しになります。

2. 実にひどい話

しかし、聖霊なる神様はその場にいる全ての人に、同じように働かれるわけではありません。今朝与えられている御言葉はこう始まっています。60節「6:60 ところで、弟子たちの多くの者はこれを聞いて言った。『実にひどい話だ。だれが、こんな話を聞いていられようか。』」この時、イエス様の言葉を聞いた「弟子たちの多くの者」が、イエス様の「6:54 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、永遠の命を得、わたしはその人を終わりの日に復活させる。6:55 わたしの肉はまことの食べ物、わたしの血はまことの飲み物だからである。6:56 わたしの肉を食べ、わたしの血を飲む者は、いつもわたしの内におり、わたしもまたいつもその人の内にいる。」という言葉聞いて、とても聞いていられない。何とひどい話だ。と言ったのです。イエス様の肉を食べる、血を飲む。これは文字通り受け止めれば、実におぞましい話です。とても聞いていられないと思ったのも無理はありません。しかし、イエス様がここで告げられたことは、イエス様が与えようとされる救いの中心にあるものです。極めて重大な話です。しかし、弟子たちの多くはそれをひどい話だとしか受け取れませんでした。イエス様を信じない人ではなく、弟子たちがそう思ったのです。どうしてでしょうか？それは、先ほど申しましたように、彼らはイエス様の弟子と言いながらも「見える命」しか分からなかったし、イエス様が与えてくれる救いと言えばパンが与えられるとか、病気が癒やされるとか、そういうことしか考えることが出来なかったからです。イエス様が与えてくれる「永遠の命」とか「復活」とか「イエス様の命と一つにされる」というようなことは、全く理解することが出来なかったからです。

しかし、彼らが特別不信仰であったわけでも、理解する力がなかったからでもありません。人間とはそういうものです。見えることしか分からないし、信じられないし、見ようとしなない。教会に集い始めた頃、私共は全く彼らと同じように思ったのではないのでしょうか。五十年前の私はそうでした。人間が復活することを信じている人がいるということ自体、とても信じられませんでした。頭がおかしいのではないかと思いました。それが今では、これこそ私共に与えられている救いの恵みそのものであり、何にも奪われることのない希望だと告げる者になっている。もっぱらそれを伝えるためだけに生きる者になっている。不思議なことです。これが聖霊によってということなのでしょう。

3. 霊による言葉

イエス様は弟子たちがそのようにつぶやいていることに気づいて、こう言われました。61 節半ばから「あなたがたはこのことにつまずくのか。6:62 それでは、人の子がもといた所に上るのを見るならば……。」これはイエス様が十字架の上で死なれ、三日目に復活され、40 日後に天に昇られる、あの昇天の出来事を指しています。元いたところとは、天の父なる神様の御許です。イエス様が天に昇っていくのを見たなら、いよいよ混乱してしまうだろう。イエス様を神様として受け入れることは出来ないだろう。と告げられました。そして、続けて「6:63 命を与えるのは“霊”である。肉は何の役にも立たない。わたしがあなたがたに話した言葉は霊であり、命である。」と告げられましたが、ここで告げられた「命」とは永遠の命を指しています。永遠の命を得るためには、良い人になるとか、良い業に励むといった肉の業は何の役にも立ちません。ただイエス様の言葉を真実なものとして受け止め、イエス様を信頼し、イエス様の命、永遠の命を受けるためには、ただ聖霊なる神様のお働きによります。弟子たちは一度はイエス様に付いていこうと思った。だから弟子になったのでしょう。しかし、イエス様の言葉に躓いてしまいました。

私はここでイエス様が語られた「種まく人のたとえ」を思い起こします。マタイ 13:3 以下にあります。「種を蒔く人が種蒔きに出て行った。13:4 蒔いている間に、ある種は道端に落ち、鳥が来て食べてしまった。13:5 ほかの種は、石だらけで土の少ない所に落ち、そこは土が浅いのですぐ芽を出した。13:6 しかし、日が昇ると焼けて、根がないために枯れてしまった。13:7 ほかの種は茨の間に落ち、茨が伸びてそれをふさいでしまった。13:8 ところが、ほかの種は、良い土地に落ち、実を結んで、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍にもなった。」とても有名な話です。このたとえの解説をイエス様ご自身がされています。19 節以下「だれでも御国の言葉を聞いて悟らなければ、悪い者が来て、心の中に蒔かれたものを奪い取る。道端に蒔かれたものとは、こういう人である。13:20 石だらけの所に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて、すぐ喜んで受け入れるが、13:21 自分には根がないので、しばらくは続いても、御言葉のために艱難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまう人である。13:22 茨の中に蒔かれたものとは、御言葉を聞かすが、世の思い煩いや富の誘惑が御言葉を覆いふさいで、実らない人である。13:23 良い土地に蒔かれたものとは、御言葉を聞いて悟る人であり、あるものは百倍、あるものは六十倍、あるものは三十倍の実を結ぶのである。」皆さんは、どの土地でしょうか？ここに集っているのですから「道ばた」ではないですね。多くのキリスト者は奥ゆかしいので「石だらけの土地」とか「茨の土地」とか言います。中々「良い土地」と言う人はいません。でも、皆さんは「良い土地」です。少なくとも神様が「良い土地」にしようとして、導き、訓練してくださっている。生まれつき良い土地の人なんていません。誰だって困難も迫害も嫌です。そんな目に遭いたくありません。この世の煩いや富の誘惑には誰だった弱いのです。でも、神様が聖霊を与え、御言葉によって私共の心を耕してく

ださって、良い土地にし続けてくださっています。ありがたいことです。ところが、聖書はこの時「弟子たちの多くが離れ去り、もはやイエスと共に歩まなくなった。」(66 節)と告げます。とてもこんな訳の分からない話をするイエス様に付いていくことなど出来ないと思ったからでしょう。大変なことが起きたわけです。この時、イエス様はガッカリされたと思います。私でしたら、こんなことがあったら「もうやめにしよう。やってられない。」なんて言いかねません。

4. 父から許しがなければ：神様の選びによらなければ

しかし、勿論イエス様はそうではありませんでした。それは、イエス様はご存じだったからです。64 節から「6:64 しかし、あなたがたのうちには信じない者たちもいる。」イエスは最初から、信じない者たちがだれであるか、また、御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられたのである。

6:65 そして、言われた。「こういうわけで、わたしはあなたがたに、『父からお許しがなければ、だれもわたしのもとに来ることはできない』と言ったのだ。」とイエス様は告げられました。更に 70.71 節で「6:70 すると、イエスは言われた。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」6:71 イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。」と告げられておりますから、イエス様は誰が自分に付いて来るのか来ないのか、そして誰が自分を裏切るのか、その全てを知っておられました。イエス様の深い孤独というものを思われます。イエス様を信じ、イエス様に従って生きていくためには、まさに私共の思いを超えた、イエス様の言葉で言えば「父からお許し」というもの、別の言葉で言えば「神様の選び」、そしてそれに基づく聖霊なる神様のお働きというものがなければイエス様を信じ、愛し、従っていくことは出来ないということです。しかし、これを具体的に知っているのは神様・イエス様だけです。私共は分かりません。しかし、こういうことは私共には分からない方が良いでしょう。分かったら大変です。もし私共がそれを知ってしまったら、それでも同じように愛することが出来るでしょうか。イエス様は出来ます。神様ですから。しかし、私共の小さな愛ではそれは到底無理でしょう。どうせ、この人は裏切る人だからと思って愛せないでしょう。だから、私共には知らされていない。それで良いのです。

5. 12使徒：選ばれし者

さて、多くの弟子達がイエス様の元を去って行きました。では、全ての弟子が去って行ったかと言いますと、そうではありませんでした。12弟子、12使徒達は残りました。イエス様は12弟子たちに問いました。「あなたがたも離れて行きたいか」これは「みんな離れていった。あなたた

ちも離れていって良いんだよ。どうなのだ？」そんな感じで問われたのでしょ。それに対してのペトロの答えはこうでした。「主よ、わたしたちはだれのところへ行きますか。あなたは永遠の命の言葉を持っておられます。6:69 あなたこそ神の聖者であると、わたしたちは信じ、また知っています。」ペトロは、皆が離れていっても私はあなたを離れません。あなた以外に、私共がお従いすべき方はおりません。あなたこそ、永遠の命をの言葉を持っておられるお方です。あなた様こそ神様に選ばれ、立てられ、神様と共におられるまことに聖なるお方です。私共はあなたを信じます。そう答えたわけです。ペトロは「永遠の命」というものを受け入れ、信じました。中身は良く分からなかったでしょう。それでも、イエス様と共に「命の言葉」、永遠の命を与える神の言葉があることを信じました。ここでは、ペトロが答えたと記されておりますので、私共はペトロ一人が答えたように読みがちですが、福音書ではイエス様に弟子達が問われたときは、ペトロが代表として答える。そういう記し方をしています。この時も、ペトロだけがそう考えたのではなく、このペトロの答えが12弟子たちの総意、皆が思っていたことだったということです。まさに、12弟子は「父なる神様が選ばれ、御許に来ることを許された者たち」でした。

このことを、イエス様はこう告げることによって、いよいよはっきり告げられました。70節「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。」父なる神様がこの12人を選ばれたわけですが、実際にはイエス様ご自身がこの12人に声をかけ、ご自分の元に招きました。これは微妙なところですが、イエス様の元を去って行った弟子たちは、イエス様が選んだのではなく、イエス様の奇跡を見て、自分でイエス様を選んで、イエス様に付いてきたのでしょ。自分で選んだということは、自分が期待し、こうであるはずだと思っていたのとは違ったならば「これではない」と言って離れていく、去って行くということなのでしょう。それは主人は自分であって、その主人の座をイエス様に引き渡してはいないということです。それでは信仰にはなりません。

6. イスカリオテのユダ

12使徒達は神様が、そしてイエス様が選んだ者たちであつた。そこに、他の者たちとは決定的に違う、12使徒達の信仰の原点がありました。そして、ここに彼らの信仰の確かさ、救いの確かさの根拠があります。それは私共も同じです。私がイエス様を選んだのではありません。イエス様が私を選んでくださった。だから、私共は安心して良いのです。先ほど、「種まきのたとえ」のことを話しました。私共は胸を張って、「私は良い土地です」と言えないかもしれません。「石地」や「茨の地」ではないかと思っているかもしれません。確かに、素材としてはそうでしょう。しかし、イエス様は御言葉と出来事を通して、私共がいよいよイエス様を愛し、信頼し、お従いする者へと変え続けてくださっています。ですから、神様から見ればみんな「神様の良い畑」なんです。豊か

な実を結ぶことになっている。だから、安心してください。何ととっても、私共はイエス様の肉を食べ、血を飲み、イエス様と一つに結び合わされているのですから。

だったら、イスカリオテのユダはどうか？そう問われる方がいるかもしれません。イエス様はこう告げられました。「あなたがた十二人は、わたしが選んだのではないか。ところが、その中の一人は悪魔だ。」6:71 イスカリオテのシモンの子ユダのことを言われたのである。このユダは、十二人の一人でありながら、イエスを裏切ろうとしていた。」6 4節でも「御自分を裏切る者がだれであるかを知っておられた」と告げられています。「イスカリオテのユダの裏切り」については、様々な議論がされてきました。イエス様はイスカリオテのユダが裏切ることを知っていて、どうしてユダを12弟子として選ばれたのか？あるいは、結局の所、イスカリオテのユダは救われたのか？などなど様々な問いが生まれます。正直な所、良く分からないところがあります。多くの小説家達が、イスカリオテのユダに焦点を当てて多くの本が著されました。人間ユダの苦悩と決断といったモチーフで描かれることが多いようです。小説・文学としては、そのようなアプローチになるでしょう。読み物としては面白いでしょう。

しかし、このことについて聖書の記述からはっきり言えることが二つあります。一つは、ユダがいなければイエス様の十字架への道は成就されなかった。その意味では、ユダは確かにイエス様の救いの御業のために用いられたということ。そして、もう一つ。聖書はユダに対して肯定的には記していないということです。イエス様はここで「悪魔だ」とまで言われています。つまり、聖書はユダになってはならない、ユダにはならないように、そう告げているということです。私共はこの聖書のメッセージを素直に受け止めたいと思います。可能性としては、誰もがユダになり得ます。しかし、神様・イエス様はそうならないように、私共に聖霊を注ぎ続けてくださいます。そのことを私共は求め、祈り、そして聖霊なる神様の導きを信頼してまいりましょう。私共は百倍、六十倍、三十倍の良き実を付けるように、神様に導かれているのですから。

お祈りいたします。

恵みと慈愛に富たもう、全能の父なる神様。

あなた様は今朝、聖書を通して、私共が神様に選ばれ、イエス様の救いに与っている恵みを新しく心に刻ませてくださいました。感謝いたします。私共が選んだのではなく、あなた様が私共を選んでくださったのですから、間違いありません。私共に与えられた救いは、必ず多くの実を結び、救いの完成へと導かれていきます。そのことを信頼して、安んじて、御国への道を、あなた様と共に、あなた様の平安の中を、この一週間も歩んでいくことができますように。

この祈りを私共の救い主、主イエス・キリストの御名によってお祈りいたします。アーメン